

六花紛々

りうとう生

▲幼稚園の生徒と戦争

予は一日、日本橋區の北新堀邊にある、某幼稚園を參觀せり。今其參觀記は暫らく口にせざるも、之れが爲めに、予は多大の感想を起せる一事あれば、それを左に録せん。

恰も、二時間目の休課なりき。予は遊歩場に出で、生徒の運動せる様を見てありしに、南の一隅に三人の少女ありて、何やら頻りと熱心に話し合へるを見留めれば、其側に近寄り、何知らぬ顔して其話に耳を借せしに、西洋人が「私は日本語を習ひ初めました」とでも云へるごとき、いと覺束なの口調を以て、日露戦争の話なせる様なり。

予は、其内の一人なる、眼のクリ〜とした、顔のポツテリと肥へたる、筒袖を着せる少女に對ひ、

「少女は、なんて名なの。」

と尋ねしに、予の顔を見てニコリと笑ひ

「妾はね、おのぶちやん。」

と愛想よく答へたり。次に、其右手にある、顔の

少し面長な少女に對ひ、

「那麼では、少女は何て云ふの。」

と尋ねしに、恥しとや思ひけん、下を睨たま、名

乗らうともせず。この時、先の愛想よしの「おのぶちやん」が、

「這女は、お友ちやん。」

と云つて「お友ややん」の肩をポンと一つ。予は

之れにて其「お友ちやん」なることを知る。次に、

今一人なる少女に對ひ、

『少女のお姓名聞かして頂戴な。』

と問ひしに、這女も「お友ちゃん」の眞似其儘。

此に於て予は「お信ちゃん」に問ふの早道なるを悟り、

『お信ちゃん、この少女の名は、何て言ふの。』

と尋ねしに、彼の愛想好の「お信ちゃん」も、この度は無言の躰。更に彼の少女に對ひ、

『少女は、お松ちゃんと言つたけな。』

と開發的教授法を應用せしに、何等の功もなし。

さらばとて、この上強いて發問しなば、「かつ母さ

ん」と泣き出されては大變と思ひ、其儘にして、

予は側の櫻木に寄りかゝり、那麼とはなく、三人

の様子を伺ひ居りしに、又話は初まれり。

『あのねえ、妾の兄さんは兵士さんなのよ。今ね

戰に往て、よ。』

と椿の花の如き口より、透き通るやうな聲にて言

ひし其主は、爪核なる白色の、紅いパッチリとせ

し眼元に、愛嬌溢るゝ品の卑しからぬ面差、加ふ

るに、紫色のリボンを、蜻蛉の止まりし如く、其

ふさくとせし、お下げの髪の上に差ししは、殊

の外この少女の、可愛らしさを増したり。之れな

ん、予の姓名を聞きしとき、雜兵には名を聞かす

も汚がらしと名乗り給はらざりし彼の少女。

『あなたの兄さんは、露西亞の兵士に敗けやしな

くツて。』

と天真爛漫たる言語を放ちしは、彼の友ちゃん、

之れを聞きたる無言の少女は、憤然とせしにや

『あら、妾の兄さんは強くてよ、いゝ事よ。』

と少し水蛙面たり、元より幼女のことなれば、其

機嫌直すことも得せず、一時は焼火に水濺さしが如し。

較暫らくせし頃、彼の愛想好の「お信ちやん」は「若しか、日本が露西亞の兵士に敗けたら、什麼なるでせう。」

と嘘然と問を發せしに、之れに氣を引かされて、不機嫌たりし無言の少女は、

「なに、露西亞なんかに敗けや爲なくつてよ。妾露西亞の兵士が來たら、刀で首斬つてやるは。」

と先きの不服は何所へやら逃げ失せて、恰も巴御前氣取り、この時、彼の「お友ちやん」は、語氣に力を含め、

「妾だつて斬つて遣りますよ、妾の宅の好い方の、鋏で斬つてやるは。」

この時、予は思はず失笑せり。さりながら、よく

其の言語を味はへは、「鋏で斬つてやるは」の中に、所謂日本魂の含蓄せるを見るなり。

お信ちやんも、我れ劣らじと思ひけん、活々とせし口調を以て、

「あのね、妾のお父さんがさう言つてましたは、若しか日本が敗けたら、お父さんと、先生も、兄

さんも、皆人が兵士さんになるんだつて。妾も其時には、兵士になつて敵の首、五ツも六ツも（この時聲を一層強め）取つて遣つてよ。ねえお友ちやん。」

と語り、全身皆是膽と云へる如き有様なりき。この時、四五名の男生隊を組み、一齊に。

「我國守る武士の、大和心を人間は、朝日に匂ふ山ざくら、咲くや霞の九重に」

足並揃ふと覺しく。

「左近の花に風吹かば、

四方におきてん武士の

守れや守れはこ取りて

わだしむら雲討ち拂ひ」

聲勇ましく、三人の小女見かけて進入、あはや入

り甞れんとせし其時。始業の鐘烈しく、

「ジャンジャン〜……………」

讀者諸君、この少女の談話を耳にして、果して如

何なる思をか起し給ひし、予は、この少女の言語

のみを以て、一朝事ある日に當りて 我國民全躰

悉く、頼みとするに足ると信する心を、一入強

くするを得たり。未だ東西の別をも知り得ざる、

無邪氣なる少女に於てすら斯のごとし、況して日

本男兒に於てをや。

彼の昨二月八日、旅順近海に於て、轟然爆然、

天柱折れ地軸崩るの勢を以て、日露の齟齬を開

きし以來、連戦連勝、皇軍の進む所敵なく、今は

全く制海權を我手に歸し、本年元旦早々、日堡壘

占領、望臺占領、敵將ステツセル將軍は、愈よ

開城の申告を、乃木大將迄提出致せるが如き、

未曾有の大快報に接し、吾々の未だ曾て知らざる

新年の御慶を、愛度申納むることを、共々に得る

に至りしも、皆之れ、彼の少女の談話中に包含せ

らるゝ、大和魂に因らずして、はた何にか求めん。

噫少女なる哉。噫大和魂なるかな。

▲小兒のお正月日記

この日記の主は、津村國太郎として、今春十三歳

なる高等小學二年生なり、諸學科中最も文章を得

意とし、一週一回宛、予の本に文章を持參するを

例とせり。左に掲ぐ所の日記は、お正月日記の

内に、元旦のみの一節を抜きしものにして、嘗て予が、其書き方の大体を語り、是非綴りかけよと命じたるものなれど、一言一句も添削せず其まゝを記せり。

一月一日

津村國太郎

今日は元正月でありますから、何時もよりか早く起きやうと思つて、まだ雀や鳥の鳴かない先に起きました。ちやうずを濟ますと、すぐ父母に祝辭を述べまして、おぞうにを食べました。二せん目を食べかけると、號外々と云ふ聲がしますゆへ、一枚買ひますと、お父さんが、読んで聞かせて、松樹山を占領したつて聞きました。

すると、下女のふつねが、しよーゆ山をせん

じよーしましたか、と云つて、皆を大そー笑はせました。おばーさんが、笑ふかどには福來り、目出たいくつて申されました。

私はおぞーにを、七ツ食べましたら、お父さんが、お前は年が一つ大きくなつたから、昨年よりは、二つもたく山食べるよーに成つたつて申されました。

それから、學校に式に行きまして、十一時半に歸りごはんを食べました。それから姉さんと、手風琴や文章をおそはる、太田先生の所へゆきました。ところが先生は留守であります。姉さんは、いつも先生はお留守だねと、云ひながら歸りました。

歸りますと、淺草のお清さんと秀雄さんが、遊びに来てゐました。私の家で二時間ほど遊ん

で、お母さまと姉さんと私と、お清さんと秀雄さんとで、淺草の秀雄さん所へ行きました。電車で行きました。私は手風琴を以て、姉さんは月琴を以て、おつかさんは百人しゆうをもちました。

それから、月琴や手風琴を鳴しますと、お清さんが大それた上手になつたつて、ほめました。私はうれしくあります。姉さんは二人で日曜にはおけいこに行きますから、こんどはもつと上手になりますつて、云ひますと、おつかさんが、そんなじまんしてはいけなないと云はれました。それから、おちそーをよばれて電車で歸りました。

歸ると、姉さんと二人で、日記を作らねば、申わけかないで、書きました。すますと、姉さ

んのお友だちか来て、かるたをはじめました。私は日記のすむまでしなかつたのです、ねたのは十二時すぎでした。

▲少女の文學

この頃の發句の流行は非常なものなり。新聞雜誌と名の附くものに、殆んど發句のなきものなし。新聞雜誌にして、發句の缺けたるものは、何となくもの足らぬ心せらる。發句の隆盛亦極まれりと云ふべし。

予の知る女學生に、發句を熱心に學べる人あり。頃日數十句を示し、予に添削してよと乞はる。見るに、中には捨て難き句、なきにしもあらず。依つて左に記すこと、せり。元より、少女の習ひ初めなれば、讀者に示すほどの名句出來得べき筈なし。只年齢の割合にはと思ひて、掲げしものに

過^すぎなれば、讀^よ者、其心^{こころ}してよ。

△夏秋雜吟^{かしゆきざん}

松岡とし子(十五才)

山寺の萩花咲きてキリくす
虫の音や古郷しのぶかりの宿
今朝とりし虫は眠りて夜半の月
山路に蛇の横たふ暑さかな
夕立や横空にげて秋あつし
かやの中稻妻光る人のかは

△裕

津村伊勢子(十六才)

日暮には綿入はしや初裕
初裕身に添ふ風やなれ心
昨日今日裕着出す花見かな
今日の花見にと姉より此裕

△時 鳥

全 人

あの枝に月をかけはや時鳥
はととさす鳴きつる方に一夜かな
はととさす一聲きかせ明けぬ間に
鷺の眼にふんな落しぞ時鳥

△田 植

恐田千代子(十四才)

これのみは男もゆづる田植哉
乙女子に鶯交る田植かな

△日 傘

全 人

旅女日傘かついで路いばり
子守子や日傘たゝみて地藏堂

△田 植

佐藤たけの(十六才)

下手なほど丁寧さうな田植哉
なく子をば路に境へて田植哉

△日傘

全人

藤園や身動き出来ぬ日傘かな

△更衣

全人

初日には横にもならず衣更
衣更心も共にわたらしく

△短夜

大澤千鶴(十七歳)

短夜や朝けいこうに小言かな

短夜や皿に飯もる給仕人

短夜や直立さるゝ生徒かな

短夜や語り盡さず別れけり

(予は、少女らしくも無き、古句めきたるもの多きを遺憾となす)

雪つぶて

つねを

一、いつか積りし大雪の

庭に戦かふ稚兒等の

よせくる敵はかはくとも

あかさ心のひと筋に

雪のつぶてに骨くたき

氷の刃戟に肉やぶる

二、くろき煙をわけ入りて

向へる敵はさきはらひ

手足は雪にこはるとも